

なきあげたるまがくしくにくし。

〔嬉遊笑覽禽十二〕犬の聲をべうくといふは、彼遠吠するをいふなるべし、猿樂狂言にもみえたり、又卜養が狂歌集に、いぬまもちといふものを出しけるに、べうくと廣き庭にてくひつくは白黒まだらいぬま餅かな、望一千句、古宮はびやうくとあれ秋さびし狐を犬の追まはりぬる、夷曲集に、犬櫻みてよむ歌は我ながらまかるべうともおもほえず候、土佐國人は今も犬の聲をべうべうといふ、又べか犬とは、めか、うしたるやうの犬の面なればいふにや、埋草寛文元年撰、界云也、獨吟千句牛井ト養落、れもせぬ花一枝を所望してのぞいてみれば、るか紅梅垣の内に日も永べえの犬ふせり、因果物語に、べか犬をつれて來れり、又べいかともいへり、是をおもへば、吠狗の訛れるも、まざるべからず、續山井、珍花とてあいすべいかの犬ざくら、重昌、珍花は、チン、狗を含めり、中井竹山が茅草危言に、狗の子をべかと云といへり、子狗には限るべからず。

〔松屋筆記九十七〕尾を振て物を乞

俗に尾を振て物を乞といふは、犬にたとへたる詞也、輟耕錄十五丁オに、若喪家之狗垂首貼耳搖尾乞憐と有。

〔今昔物語二十六〕陸奥國府官大夫介子語第五

此父ノ介沙汰有事有テ、御館ニ有テ、久ウ家ニ不返リケル程ニ、繼母此郎等ヲ呼取テ云ク、此ニ人數有レ共、見タル様有テ、汝ヲ殊ニ哀レニストハ知タリヤ、郎等ノ云ク、犬馬ソラ哀ニ爲ル人ニハ尾不振様ヤハ候フ何ニ申シ候ハムヤ、人ニ取テモ己ハ喜キ事ヲバ喜ビ、佃キ事ヲバ佃トコソハ思ヒ被取候ニ、无限御願ノ替ニハ生死モ只仰ニ隨ハントコソハ思ヒ給ヘ候ヘ、略下

〔嬉遊笑覽禽十二〕けしくとて犬をかくるをけし、かるといふ、古きこと、見えて、鏡波集西音、我心なたね許に成にけり人くひ犬をけしといはれて、